

眞平新報

2025年(令和7年) February

発行者 眞平
http://s-shimpei.com/
f X i

原因不明の籠城に冷汗

14日、デイキャンプ場の利用抽選に当選し、子どもと友だちや家族を誘って焚火会を行った。



三回目ともなるともう火熾しはお手のもの(開催自体が危ぶまれたので安堵した瞬間)

大人五人、子ども六人の三家族が参加した、三年ぶり三回目の焚火会だが、開催当日の朝、出掛ける直前になって子どもがトイレに籠城してしまった。

大人五人、子ども六人の三家族が参加した、三年ぶり三回目の焚火会だが、開催当日の朝、出掛ける直前になって子どもがトイレに籠城してしまった。

が、やはり原因不明のまま子どもがトイレから出てきた。予定の40分遅れになってしまったが、なんとか無事になった。

いつも以上に無邪気に焚火を楽しんでいた様子であったが、トイレに籠もった理由や原因は依然として判然としないままである。



ホットサンドは焼き火料理の最適解(簡単に手軽で美味しい)



初対面でも直ぐに仲良く遊べるのが子どもの凄さ(トイレ籠城は何だったのか) 今回結果オーライではあったものの、こうしたことがあると、今後、予定や企画を立てることに、どんどん臆病になってしまつう。本当に難しい。

妻の工夫に頭が下がる 菓子作りで凌ぐ週末

ここ最近、週末や連休に子どもを遊びに連れ出そう



としても、こぼれごみ拒否されてしまつう。かと言って、子どももなにかやりたい事があるわけでもないの、悶々と過ごすことになるのだが、このところ、あんびるやすこ『ルとララのレシピカードブック』のレシピをもとに、妻子でお菓子を作ることで、どうにかこうにか休日を凌いでいる。妻には頭が下がる思いである。

12頁12時間の計画 飛び石休の野望



子どもたちの計画の一つであるボールプール(ラウンドワンに)

子どもたち同士で全12頁のしおりを作成し、朝8時から夜20時までの遊びの計画が綿密に予定されていた飛び石休の11日。

流石に12時間にも及ぶ長大な計画は看過することができず、まずは計画変更の説得から始めたのだが、一緒に遊ぶ子の親御さんたちの全面的な協力の申し出のおかげで、子どもたちの綿密な計画は、概ね実現したのだった。ありがたや。

眞平御免

もつすべ折り返し地点に差し掛かろうとして、今年度の学童クラブ問題に、今は頭を痛めていると云つてます。▼明けの夜はない、と思いたいところではあります。我が家の夜明けはまだまた遠いような気がします。

今日の視聴覚 記録と記憶

431頁 派遣者たち

2024年 キムチヨヨプ 著

書籍

物語中のひとつひとつの設定は、様々なSF作品で描かれてきた焼き直しではあるのだが、その組み合わせによって生み出された世界観がまさにキム・チヨヨプという作品。自分の出自や他者との共生の難しさに悩みながら、大きな痛みを伴う決別を断行する主人公。オチの無い物語が必要ない時代なのかもしれない。

306頁 調査する人生 岸政彦 述

社会調査に携わる社会学者同士の対話集。読めば読むほど、社会学とはいったい何なのか、よく分からなくなってくるのだが、本書で述者が何度も語る「基地費成派の集団自決生存者」についての、一括りにはできない語りや難しさにこそ、社会学の意味があるように感じる。一括りにはできない語りについては「一概に言えなくしていく」という述者の言葉も印象深い。

357頁 生きる演技 町屋良平 著

2024年 町屋良平 著

書籍

複雑な家庭環境と演技経験を共に持つ生崎と笹岡。文化祭で行われた舞台上で、前向きな歴史変更に気付きを得る生崎に対し、暴力による現状変更を衝動的に行ってしまった笹岡。意図的に主体性が隠蔽された文体的効果により、高校生特有の曖昧で利他的な関係の距離感、揺れ動く正義や狂気がより生々しく感じられる。

201頁 成瀬は天下を取りにいくな 宮島未奈 著

完全無欠のトンデモ天才同級生に引きずり回される登場人物、という構図は『涼宮ハルヒの憂鬱』を彷彿させる親しみある内容だが、話ごとに青春の躍ぎや気づきが丁寧に盛り込まれている点では、しっかりとした青春小説である。完全無欠の主人公が、はじめて自身の綻びに気付かされる瞬間の圧巻の表現力には脱帽。

2021年 朴沙羅 著 280頁 書籍

在日朝鮮人二世かつ社会学者らしい、と属性を括弧括弧と著者から怒られてしまつたが、とても示唆に富んだ複層的な視点で綴られる海外子育て生活の報告書のような随筆。様々な語られる言説を批評的に考察し、物事の前提にしっかり立ち返って考えを深めていく姿勢は自分も身に付けたいところ。

2024年 2枚組 SCIENCE FICTION 宇多田ヒカル

宇多田ヒカルのデビュー25周年記念のオールタイム・ベストアルバム。邦楽界隈では、宇多田ヒカル前後で歌謡曲の流れが大きく変わった、とも言われるが、確かに、国民的な歌い手という意味では、彼女を頂点にして、かつ彼女を最後にして、もうこの国に現れることはないだろうと思う。妻は収録曲をすべて歌えた。